

多様な働き方に配慮を



秋山みどり

京都大学大学院工学研究科分子工学専攻
[615-8510] 京都市西京区京都大学桂
助教, 博士(工学).
専門は有機合成化学.
http://www.moleng.kyoto-u.ac.jp/~moleng_05/

齢30歳をすぎ、友人が次々と出産する。自分に子供はいないが、友人らの様子を見ていると、育児をしながら大学で研究を続けるのはかなり難しそうだと感じる。共働き世帯が急速に増えている令和の時代になっても、大学アカデミアのシステムは未だに「専業主フに家事育児を丸投げできる研究者」を前提に成り立っているように思える。17時から始まる会議に、土曜日に行われる行事。育休を取得した研究者には、片手で数えるほどしか会ったことがない。男性研究者に向かって「育児は嫁さんに任せればいだろう」と発言する教授もご健在と聞く。このような世界を敬遠するのは、今や女性だけではないようだ。男女かかわらず優秀な若手研究者が続々と流出していくのを、最近とみに感じている。この旧態依然とした気質が変わらない限り、業界は衰退していく一方だろう。

そんな危機感を抱いていた矢先、若手研究者が集う講演会を主催する機会が訪れた。例年は一堂に会して講演会と懇親会を行っていたところを、コロナウイルス感染拡大防止のためにオンラインで行うことになった。ここで問題になったのが、開催日時である。最初の案は、平日夕方から夜にかけての開催だった。しかし、それでは保育園が閉まる時間以降、育児責任のある研究者は懇親会に参加できない。たかが懇親会と言えど、参加することで情報が入るし、友達ができるし、モチベーションが上がる。20代から30代にかけての時期の人脈作りは研究者にとって必要不可欠であり、仮に育児期間中に懇親会から排除され続けたら、とても大きな損失だ。最終的に、17時に離席する人でも、懇親会の最初の30分に参加できるスケジュールを採用した。「16時台から懇親会を始められてもお酒が飲めない、早すぎる」という意見をいただいた。講演会を昼間から始めたので、研究室運営が忙しくて参加できない若手教員もいた。16時半の乾杯の挨拶を聞きながら、やはりちょっと早すぎたのだろうかと不安に思った。懇親会が盛り上がり始めた17時、20代男性研究者がおもむろに言った。「娘のお風呂の時間なので、今日はこれで失礼します。」……この一言で、自分の決断は間違っていなかったと安堵した。少しの配慮で救われる研究者

がいる。

昨年度まで所属していた専攻の卒業論文中間発表会は、11月の第三土曜日に行うのが慣例だった。学科一同が集って執り行う伝統的な会であり、授業や学会が重なる時期でもあることから、土曜日に開催するのがスケジュールを組みやすいという事情は理解できた。学生のときは、それを疑問にも思わなかった。しかし、育児中の研究者はどうだろうか。第一に、通常保育園・幼稚園・小学校は土曜日がお休みなので、その日は自動的にほかの家族に育児負担を押しつけることになる。第二に、11月の土曜日は保育園・幼稚園・小学校の行事が重なりやすい。「学芸会で劇の主役をやるのにパパ来ないの?!」と息子さんに失望された同僚を見て、このままではいけないと確信した。研究や教育も大事だが、二度と同じ瞬間が訪れないライフイベントも、きっと大切だ。問答無用に後者を諦めなければならない状況は、絶対に良くない。昨年度初旬、思い切って「卒論発表会を平日にできませんか」と専攻長に直談判した。なんと、その年度のスケジュールから変えていただくことになった。すでに決まっていた土曜日の予定を平日に変更し、授業日程や会場を調整する、その労力はいかばかりだろう。一若手教員の意見を、専攻長を始めとした教授の先生方に受け入れていただいたことに、大変勇気づけられた。声をあげれば、少しずつでも良い方向に変えられる可能性がある。

今回は育児にフォーカスしたが、生きていれば育児だけではなく、介護や自身の病気などさまざまな状況が訪れる。私たちはこの業界を「ライフイベントにコミットしたい／しなければならない人は生き残れない世界」にしたいのだろうか？ 旧来の土俵で生き残る術を見つけ、その環境を変えようとしないことは、排他性の温存に加担することと同じだ。「ジェンダー平等」が流行語大賞にランクインし、厚生労働省が「働き方改革」を推進するなど、奇しくも世の中が転換期だ。誰もが働きやすい業界に、変えるなら今しかない。多様な状況にある研究者に配慮すること、そして配慮不足に声をあげること。自分ができることを続けていきたい。